

元元堂読本にみられる書簡文教材の一考察

—吉田彌平読本との比較を通して—

A Consideration of Epistolary Educational Materials in the Tokuhon,
an old Japanese textbook, edited by Gengendou
Through a Comparison with the Tokuhon edited by Yoshida Yahei

中 嶋 真 弓

NAKASHIMA Mayumi

キーワード：元元堂読本、吉田彌平、書簡文

1. 問題の所在

明治44年文部省は「高等女学校及実科高等女学校教授要目」を制定した。その内訳をみると、講読における教材の程度は「講読ノ材料ハ普通文ヲ主トシ口語文・書牘文・韻文ヲ交フ（中略）書牘文ハ平易ニシテ繁縟ニ失セス日用書牘文ノ模範トスヘキモノタルヘシ」とあり、作文教材の程度では「作文ハ現代文及書牘文ヲ主トシ」とある。読本における書簡文は「日用書牘文ノ模範」であり、作文では、日用書牘文を書くことが求められていたということである。では、「日用書牘文ノ模範」とされた書簡文とはどのようなものであろうか。

そこで、本稿では、元元堂『改訂高等女学校用国語読本全10巻』（1912年発行 訂正5版）（以後、『元元堂女読本』と記す）の書簡文教材に注目し、「日用書牘文ノ模範」とする書簡文がどのような特徴を有し、それが読本においてどのような役割を担っているかを明らかにすることを目的とする。書簡文に注目する意味は、作文教育における書簡文の位置付けが明治期、大正期にかけて作文教育に大きく関わっていると考えるからである。

『元元堂女読本』は、文部省（1910）の『明治四十三年度現在師範学校 中学校 高等女学校使用教科図書表』によれば、192校中31校（16.1%）の高等女学校が使用している。同調査で最も多く使用されているのが吉田彌平、小島政吉、篠田利英、岡田正美共編『三訂女子国語読本全10巻』（1912年発行 訂正9版）（以後、『吉田女読本』と記す）で66校（34.4%）、続いて、明治書院編集部『再訂高等女子読本』（1909年発行 訂正再版）（以後、『明治女読本』と記す）で54校（28.1%）、3番目が『元元堂女読本』である。『元元堂女読本』は、1903年から1925年¹にわたり発行していることや実科用の読本も発行していることから、長く使用された高等女学校用読本といえる。一方『明治女読本』は、1902年から1909年までの発行であるために、長期的な使用がなされていないこと、経年比較が難しいことを考慮し本稿では取り上げなかった。

『吉田女読本』は、1902年から1924年（訂正18版）の長きにわたり普及した教科書である（井上敏夫,1981）²。吉田彌平他3名『三訂女子国語読本全10巻』の先行研究では、高山実佐（2016）（2017）、中嶋真弓（2019）がある。高山実佐（2017）は、言語教材を、（A）言語知識教材（言語知識を得ることができる教材）、（B）言語技能教材（言語技能を習得することのできる教材）、（C）言語態度・言語生活教材の3つに分類し、『女子国語読本』（吉田彌平ら編）の初版から6訂版の女子中等教育段階における言語教材の変遷を分析している。高木実佐（2017）はCをさらにC1「言語全般、国語全般の価値について論じられているもの」、C2「固有の状況における一言の紹介からことばの価値を考えられるもの」、C3「話す・書く・読む・伝える等の言語の運用に関する態度・心構えや価値について考えられるもの」に細分化している。中嶋真弓（2019）では、『吉田女読本』における書簡文の役割として、以下の3点を挙げている。ここに引用する。

1. 話す、書く、読むことを言語知識、言語技能、言語態度の具体的教材から学び、関連付けながら、書簡文を書くことができるようにしている。言い換えるならば、社会、実生活に生きる言語能力を育成するための一つのツールとして書簡文が重要な役割を担っている。
2. 書簡文は日本の伝統的な礼儀や言葉遣いを継承している言語教材の一つである。その特性を生かして、書簡文に関連する言語知識、言語技能、言語態度の教材を通して女性としての有様や生き方を教授する役割を担っている。
3. 文範としての書簡文と文学的な書簡文とを採録することによって、書くことと読むことが効果的に機能することができるようにしている。そして、その学びは書簡文を書く過程において、学習者の習得・活用・探究・発信の一連の学習を生み出すことにつながる。書簡文はこのような学習者の自主的・自発的学習を生み出す言語技能教材としての役割を担っている。

先行研究から、『元元堂女読本』と『吉田彌平女読本』は高等女学校で長きにわたり使用された読本であり、この時期における書簡文の特徴および役割を明らかにすることができると思われる。

本稿では、『元元堂女読本』に採録された書簡文の特徴およびその役割を明らかにするために、内容、文末文体および頭語・結語、教材配列、書簡文の特徴にみる役割の4観点を設定する。また、『吉田女読本』との比較も行っていく。

なお、本稿の手紙文の表記は、引用以外は書簡文とする。

2. 『元元堂女読本』に採録された書簡文

2.1 内容の特徴

『元元堂女読本』に採録された書簡文を、〈表1〉に整理した。『元元堂女読本』に採録された書簡文は、23通で全体の7.8%（23/293）である。なお、一つの課に2通採録されている場合は、

課数を2とした。

まず、内容項目の観点から、採録された書簡文がどのようなものであったかをみていく。

〈表1〉『元元堂女読本』の書簡文一覧

1912.10.7 発行 訂正5版						
巻	課数・課名	文体	字体	内容項目	頭語（冒頭）	結語（末尾）
巻1	1-3：花見に誘ふ文（書牘文） 毛筆	候文体	行書	誘引	いつしかと待ちわたり候ひし熊谷堤の花、	かしこ
	・同返事 毛筆	候文体	行書	誘引の返事	熊谷堤の御花見、	かしこ
	1-20：帰宅の知らせ（書牘文） 毛筆	口語文体	行書	謝礼	只今帰りました。	かしこ
	・右返事（書牘文）（*坪内氏著国語読本に據る） 毛筆	候文体	行書	謝礼の返事	無事お帰りの由、	あら／＼
巻2	2-20：しみの抜き方を問はれしに答ふ（書牘文）（*国語読本に據る） 毛筆	混合文体	行書	問合の返事	語文拝見いたし候。	あら／＼かしこ
巻3	3-17：人の新盆に（書牘文） 樋口一葉 毛筆	候文体	行書	慶弔	待たぬ月日のたつに早くて、	かしこ
	・右返事（書牘文） 樋口一葉 毛筆（*通俗書簡文）	候文体	行書	慶弔の返事	暮れ行く空を眺め候て、	かしこ
	3-27：孫女につかはす（書牘文）	混合文体	楷書	忠告	近頃承れば、	よくよく服膺なざるべく候
巻4	4-5：日光便り（書牘文） 徳富蘆花（*青蘆集）	候文体	楷書	報知	去る二十六日午前十一時、	不具
	4-20：田舎の祖母に（書牘文） 樋口一葉 毛筆	混合文体	行書	見舞	今朝は風はげしう候うて、	よろしくと申し納め候
	・祖母に代りて従妹より（書牘文） 樋口一葉 毛筆（*通俗書簡文）	候文体	行書	見舞の返事	語文今日の午後つき申し候。	かしこ
	4-23：公子の驍方を申し遣はず（書牘文） 徳川齊昭	混合文体	楷書	忠告	餘寒の處、	申すまじく候
巻5	5-9：三秀院和尚に答ふ（書牘文） 雨森芳洲	混合文体	楷書	問合の返事	法礼恭しく拝誦仕り候。	頓首謹言
	5-15：友人の不養生を諫む（書牘文） 樋口一葉 毛筆	候文体	行書	忠告	昨夜も更にくるまで御書見遊ばされしと覚しく、	かしこ
	・右返事（書牘文） 毛筆（*通俗書簡文）	候文体	行書	忠告の返事	かけ違ひて、昨日も今日も御目にかからず、	かしこ
巻6	6-15：年始の贈答（書牘文） 下田歌子 毛筆（*女子書簡文）	候文体	行書	慶賀	新年の御じぎごと、	草々かしこ
	・返信 毛筆	候文体	行書	慶賀の返事	あら玉の年の始の御祝儀	かしこ
	6-25：木村博士に贈る（書牘文） 島村速雄	候文体	楷書	謝絶（断り）	「世界の無線電信」御稿御送附に預かり候處、	敬具
巻7	7-26：おさめどのへ（書牘文） 毛筆 細井平洲	候文体	行書	忠告	刈安賀村に三輪と申し候百姓の妻五十七歳になり申し候。	めでたくかしこ
巻8	8-20：息女に教訓せし文（書牘文） 烏丸光廣 毛筆	混合文体	行書	忠告	一筆申しまゐらせ候。	めでたくかしこ
巻9	9-4：花の頃都の娘に（書翰文） 毛筆 樋口一葉（*通俗書簡文）	混合文体	行書	報知	打ち絶え便り聞き候はねば、	かしこ
	9-22：妹にさとす（書翰文） 吉田松陰（*俗簡牘編輯）	混合文体	楷書	報知の返事：忠告	この間は御文下され、	神へ願ふよりは身に行ふがよろしく候。
巻10	10-15：新婦に与ふる書（書牘文） 江川担庵 毛筆	混合文体	行書	忠告	一夫を天と致し候ことは誰れもわきまへ居り候へば、	～差し遣はすものなり。

【備考】・巻9のみ「書翰文」となっている。

〈表2〉に示した内容項目は、稿者が書簡文の内容から項目を設定したものである。

内容項目をみると、忠告が23通中6通(26.1%)と高いことが分かる。忠告の教材は、3-27(3-27は、巻3の27課のこと。以後、同様)「孫女につかはす」、4-23「公子の躰方を申し遣はす」(徳川斎昭)、5-15「友人の不養生を諫む」(樋口一葉)、7-26「おさめどのへ」(細井平洲)、8-20「息女に教訓せし文」(烏丸光廣)、10-15「新婦に与えふ書」(江川担庵)である。なお、9-22「妹にさとす」(吉田松陰)は、報知の返事(忠告)とした。忠告の書簡文の作者をみると樋口一葉以外、江戸時代を中心とする人物である。これらの書簡文は、文範としての役割というよりは、読本の後半の巻に多く位置付けられていることから読むための書簡文、文学的な位置付けといえる。そして、それらの内容は女訓的な内容で女性の生き方、家庭に入る者としての有様について記したものである。後述する書簡文の教材配列と相まって書簡文の女性としての有様を教訓的に学ばせる修身の役割を有しているといえる。この傾向は、『吉田女読本』にもみられる。『吉田女読本』の内容項目の忠告をみると27通中5通(18.5%)である。『吉田女読本』の忠告の教材は、3-31「友人の不摂生を諫む(口語文)」、7-8「齊家の道」(真澄鏡による)、8-17「息女に教訓す」(烏丸光廣)、9-5「妹にさとす」(吉田松陰)(報知の返事 忠告)、10-3「庭の訓」(阿仏尼)で、『元元堂女読本』との同一教材は「息女に教訓せし文(「息女に教訓す」と同一教材)」と「妹にさとす」の2通である。しかし、『吉田女読本』で最も多く採録されている書簡文は報知で、27通中10通(37.0%)

〈表2〉『元元堂女読本』の内容項目一覧

内容項目	書簡数	割合
忠告	6	26.1%
報知	2	8.7%
誘引	1	4.3%
見舞	1	4.3%
謝礼	1	4.3%
慶賀	1	4.3%
弔慰	1	4.3%
謝絶	1	4.3%
問合の返事	2	8.7%
謝礼の返事	1	4.3%
誘引の返事	1	4.3%
弔慰の返事	1	4.3%
見舞の返事	1	4.3%
忠告の返事	1	4.3%
慶賀の返事	1	4.3%
報知の返事(忠告)	1	4.3%
書簡合計	23	100%

・小数点以下第2位を四捨五入しているために、必ずしも100%にならない。

である。報知の内訳としては、形式的な報告と自分の状況を報告するものおよび旅信を含めた。報知は、書簡文の形式はあるものの、自分の状況を自由に書くことができるといえる。つまり、書簡文の形式を借りながらより作文に近い内容が書けると考えられる。そのような点から『元元堂女読本』は報知の採録は2通(8.7%)と少ない。

『元元堂女読本』には、往復書簡文が6組あり、書簡文が往来物といわれるように往復書簡によって一対の学習をなすと考えられていることが分かる。この傾向は、『吉田女読本』も同様で、往復書簡が5組ある。これは、高女読本にみられる傾向で、吉田彌平編『中学国文学教科書全10巻』(1912年発行 修正8版)や芳賀矢一編『訂正新定中学読本全10巻』(1912年発行 訂正4版)にはみられない。書簡文が、双方向のやり取り、つまり礼儀、円滑な交際ができる女性としての在り方を学ばせる意図があったことが看取できる。

2.2 文末文体および頭語・結語の特徴

本節では、文末文体および頭語・結語から採録書簡文の特徴をみていく。文末文体に着目し

た先行研究には、北澤尚（1999）、茗荷円（2017）などがある。本稿では先行研究を踏まえながら、文末文体の捉えを、候文体（文末が「候」で終わる）、文語文体（文末が文語で終わる）、口語文体（文末が口語で終わる）、混合文体（一通の書簡文の中で、文末が統一しておらず混在しているもの）の四種類で調査する。

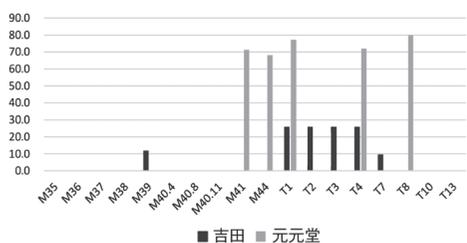
〈表3〉『元元堂女読本』の文末文体および字体一覧

文体・字体	書簡数	割合
候文体の行書	11	47.8%
候文体の楷書	2	8.7%
口語文体の行書	1	4.3%
混合文体の行書	5	21.7%
混合文体の楷書	4	17.4%
書簡合計	23	100%

〈表3〉は、文末文体および字体からみた採録数である。口語文体は、巻1の1-20の1通4.3%（1/23）、候文体は56.5%（13/23）、混合文体は39.1%（9/23）である。採録書簡文の17通（73.9%）が行書である。候文体の書簡文を行書で読むことに重点がおかれているといえる。そして、書簡文を行書で書くことが一般的であったといえる。元元堂読本の変遷からみると、1903

年から1905年に発行された読本は全て楷書での提示であったが、1908年から1919年発行の読本では、70%から80%といった高い数値で行書での提示がなされている。しかし、この傾向は『吉田女読本』とは違うものである。『吉田女読本』では、27通中7通（25.9%）が行書である。その後、1913年から1915年までは、25.9%のままであるが、1918年を境に9.5%と激減し、1921年からは0.0%である。『元元堂女読本』、『吉田女読本』の書簡文の行書提示の推移を〈表4〉に整理した。

〈表4〉行書提示の推移



次に、頭語についてであるが、〈表1〉の頭語から、往信の頭語では「一筆申しませ候」（筆系）1通、返信の頭語では、「御文拝見いたし候」（拝見系）1通、「御文〜つき申し候」、「この間は御文下され」（その他）の2通がみられるが、それ以外の書簡文には頭語がない。また、「漢語系」による頭語は1通もない。なお、分類の方法は茗荷円（2017）に依った。

〈表5〉『元元堂女読本』の結語の種類

結語	分類	書簡数	割合
かしこ	かしこ系	10	43.5%
あらあらかしこ		1	4.3%
めでたくかしこ		2	8.7%
草々かしこ		1	4.3%
不具	漢語系	1	4.3%
頓首謹言		1	4.3%
敬具		1	4.3%
よろしくと申し～	ごきげん系	1	4.3%
あらあら	その他	1	4.3%
結語なし		4	17.4%
合計		23	100%

茗荷円（2017）は頭語の規範について「頭語の有無については全時期『必須』ではない。省略しても良い度合いは、年を経るごとに強まっている傾向にある」（p.148）と述べている。つまり、社会の状況に応じた採録がなされているといえる。

結語では、〈表5〉にあるように、「かしこ系」が60.9%（14/23）と高い数値であることから、女子書簡文の結語の典型が「かしこ」であるこ

とが分かる。これは、『吉田女読本』も同様で、74.1% (20/27) が「かしこ系」である。『元元堂女読本』の頭語と結語の両方が「漢語系」のものは1通もなく、結語のみ「漢語系」が「不具」「頓首謹言」「敬具」の3通である。『吉田女読本』においては、頭語と結語の対応は4-29「浦鹽より」(太田覚眠)に「拝啓-敬具」とあるのみである。現在定型となっている「拝啓-敬具」等の対応関係は、まだ一般的になっていないことが分かる。

2.3 教材配列にみる書簡文の役割

読本の教材配列には、編者の何らかの意図があると考えられる。そこで、書簡文がどのような役割を担っているかを捉えるために、書簡文の前後にある教材と書簡文との関係を検討する。その教材の分類方法は、田坂文穂(1964)に拠った。田坂文穂(1964)は、明治期に発行された中学校及び高等女学校の読本から18部を選出し、その教材の傾向を言及している。その分類項目は、①徳育関係教材、②文学関係教材、③歴史関係教材、④随筆紀行関係教材、⑤啓蒙教材、⑥逸話伝記関係教材、⑦戦争関係教材の7項目である。なお、本稿では、③歴史関係教材を広く捉え、理科的、地理的な教科内容も含めた。また、④には日記も加えた。田坂文穂(1964)の分類項目に則して『元元堂女読本』の教材配列をみると以下ようになる。なお、1-2等の表記は巻1の2課を、①等の番号は田坂文穂の分類項目を指す。また、関係1などは、稿者が関連する教材を順番に整理するために付したものである。

◆巻1

- 関係1 1-2「国花」芳賀矢一(口語文) ⑤
 1-3「花見に誘ふ文」 同返事(書牘文)
 関係2 1-19 須磨日記 坪内逍遙(国語読本) ④
 1-20 帰宅の知らせ、叔母よりの返事
 (坪内氏著国語読本に據る)(書牘文)

1-2の芳賀矢一『月雪花』の文章は「我が日本人の国花として世界に誇れるに足るものは桜であらう。」(p.4)で始まり「春風四月、日本人はしばし花の世界の人となる。」(p.7)で終わっている。日本人にとっての桜の花について書かれた口語文である。それを受けて、1-3の書簡文が位置付けられている。花見の花は、桜である。日本人にとって桜がどのようなものであるかを説いた文章であり、その桜をみに行く誘いの書簡文につながる配列がなされている。日本人の感性、感覚、そしてそれを知識として知った上で実際にみる、お互いにみに行く、教材内容の日本人固有の精神を書簡文が受け継ぐ配列ともいえる。

1-19は日記である。冒頭は、「七月十一日。須磨の叔母様の許へ行くとして、姉様と京都より汽車に乗る。」とある。そして、十四日には「夜、叔母様に願ひて、路守川の辺まで蛭狩に行く。」とある。続く1-20の書簡文の書き出しは「只今帰りました。姉様も私も真黒になって丈夫さうになったと、母様も、父様も大層お喜びなされました。」で始まり、本文には「蛭狩が一番面白うございます。」ともある。署名では、「京都にて 千代」とある。須磨の叔母の家に遊

びに行った千代の日記が1-19にあり、帰ってからのお礼の書簡が1-20に採録されているのである。このような状況は、高女生の日常生活にありうることである。日記によって千代の夏休みの様子を読み手に捉えさせ、そこから、必然的にお礼の書簡を書くといった一連の学習がなされるのである。このような配列は、日記によって臨場感を味わった上で書簡文を書くことで、より自分の生活に結び付けやすいのではないかと考える。付記するが、上記の2つの課は坪内雄蔵（校閲）『国語読本高等科女子用全8冊』（1901年発行）（以後、『坪内女本』と記す）から、採録されたものであるが、『元元堂女読本』は『坪内女本』の内容にさらに意図的に前の日記との関係を鮮明にするために、「帰宅の知らせ」の書簡文の中に「日記がよく出来ていると、おとうさんに褒められました。」「叔母よりの返事」の中に「日記上出来とて父上様よりお褒めありし由、お喜びのほど察し入り候。」の文言を加えているのである。

◆巻2

関係3 2-20「しみの抜き方を問はれしに答ふ」（書牘文）

2-21「婦人の鑑」大和田建樹（韻文）①

2-20では、染みの抜き方についての問い合わせの書簡文である。続く、2-21は、瓜生岩子について書かれたものであるが、「身は儉約をこととして、慈善の道につとめたる」（pp.95-96）とある。当時の女性の一般知識としての染み抜きは、女性の在り方につながるものといえる。

◆巻3

関係4 3-16「英国の婦人」下田歌子⑤

3-17「人の新盆に」右返事

樋口一葉（書牘文）

3-16は、下田歌子『泰西婦女風俗』からのものである。本文には、「敬服すべきは、あへて人の内情隠微の私事を許かず、又假初にも卑猥汚濁の件を口にせざることなり。」（p.72）とある。また、「朋友間の交際に信義あり、勇氣あり、表裏異ならざることは、羨ましも羨ましき好風俗にこそ。」（p.74）と述べている。女性としてどのように話すべきかを英国夫人の有様からそのよさを伝え、人の悪口を言わないよき人間関係を構築するよう促している。その次に3-17が続くのである。相手を思いやる心情が書簡文につながる教材の並びといえる。

関係5 3-26「親心」①

3-27「孫女につかはす」（書牘文）

3-26は『国語読本』からのものである。子どもがいない会社社長の妻女は、船の中で親子夫婦6人連れに出会い、一人子どもを分けてもらうことにした。しかし、最初は快諾していた夫婦も最終的には手放せないと泣いて妻女に頼むのである。妻女はこれが親心と感じ子どもを夫婦の許へ返すのである。3-27も「父母はただ子の病をこれ憂ふ。」（p.126）とあり、親心がテーマにある。内容のつながりである。

◆巻4

関係6 4-4「武蔵野」国木田独歩（口語文）④

4-5「日光便り」徳富蘆花（書牘文）

4-4と口語文の随筆と候文の旅における書簡文という文体、文種の対比を捉えることができる位置付けになっている。また、国木田独歩と徳富蘆花とが自然について語り合う仲であったという作者同士のつながりもみられる。

関係7 4-20「田舎の祖母に」「祖母に代りて従妹より」樋口一葉（書牘文）

4-21「祖母の物語」⑤

4-21は、文部省高等小学校読本からのものである。4-20で祖母への手紙を採録し、4-21で、祖母の時代の社会状況や生活の様子を記している。直接4-20と4-21の祖母との関わりが描かれているのではないが、祖母の時代を振り返る意味で内容としての関連がみられる。また、4-21の本文には、「今は鉛筆にて物書くこと多し。（中略）手紙をしたためても、其の末を巻きて封じ込め、直ちに宛名を書くこと多かりしが、今は至る所に便利なる封筒を売る店有。実にや昔は手紙を書くことも稀なりけり。今の如き郵便の制度もなかりしかば、一々使いの手にて持たせやりしなり。」（pp.95-96）と書簡文についての内容もみられる。

関係8 4-23「公子の躰方を申し遣はす」徳川齊昭（書牘文）

4-24「身体髪膚」（格言）①

4-23では、子どもの躰方について事細かに指示を与える親側の書簡文である。4-24は、子どもに対して親がどのような存在かを示した格言から始まる。「身体髪膚ハ之ヲ父母ニ受ク、敢テ毀傷セザルハ考ノ始ナリ。（後略引用者）」とある。

◆巻5

関係9 5-8「わが幼時」新井白石 ⑥

5-9「三秀院和尚に答ふ」雨森芳洲（書牘文）

5-10「学問思弁」（格言）（漢文対照）①

新井白石の次に雨森芳洲が続いている。新井白石と雨森芳洲は、木下順庵の門下生であったことや朝鮮の国書にある称号（宛名）について対立関係にあったことで知られている。あえてこの二人を並べたところには意味があるといえる。元元堂発行参考書『再訂高等女学校用国語読本参考書巻六』（1909）にある「三秀院和尚に答ふ」の設問をみると「本課の雨森芳洲先生の勉学を、前課の新井白石先生、及び、嘗て学びし伊能忠敬先生の勤学に比較せよ。」（p.27）とある。前課の新井白石と比較させるための位置付けであることが分かる。つまり、書簡文を通して二人の勉学をテーマにした関係が看取でき、5-10の格言にもそれがつながっているのである。

◆巻6

関係10 6-24「乃木將軍」森鷗外（韻文）⑦

6-25「木村博士に贈る」島村速雄（書牘文）

6-25の書簡文の中には「東郷大將が海上に於いて目に睹ること能はざる電波を驅って十数隻の轆轤を手足の如くに指揮せられ居り候事は、一寸世人の想像の及びかね候事かと存じ候」

(p.26) とある。ここにも、戦争に関わる人間関係等の内容の関連がみられる。

◆巻7

関係11 7-25「婦行」貝原益軒 ①

7-26「おさめどのへ」(書牘文)

7-25の冒頭には、「女に四行あり。一に婦徳、二に婦言、三に婦容、四に婦功、この四つは女の勤め行ふべき業なり。」(p.111) とある。女訓の内容であり、続く7-26は、家庭人、妻の在り方についての書簡文である。

◆巻8

関係12 8-19「女性の力」土井晩翠(韻文) ①

8-20「息女に教訓せし文」(書牘文)

8-19は、理想の日本女性を歌ったものである。そして、8-20は、家庭人として心得ておくべきことを親として愛情豊かに書いた書簡文である。

◆巻9

関係13 9-22「妹にさとす」吉田松陰(書牘文)

9-23「死と永生」高山林次郎 ①

両教材とも、生死について触れている。吉田松陰の生死と相まって採られた教材と考えられる。

◆巻10

関係14 10-14「士規七則」吉田松陰 ①

10-15「新婦に与ふる書」(書牘文)

10-14は、吉田松陰が、安政2年正月に、叔父玉木文之進の子で自分の従弟である毅甫の元服に際し贈ったものである。武士や人としての在り方が記され、吉田松陰の思想をみることができる。10-15は、江川担庵が新婦に贈った書簡文であるが、形式として「士規七則」のように、「一～」、「一～」という提示で、教訓、女訓の内容である。つまり、女性として、家庭に入る者としていかにあるべきかを説いている。前者は男性として、後者は女性としての生き方について述べている点で共通性がみられる。

分類項目を関係単位で整理してみると、書簡文前後の教材では①徳育関係教材が8教材(8/14 57.1%)、②文学関係教材、③歴史関係教材が0教材、④随筆紀行関係教材が2教材(2/14 14.3%)、⑤啓蒙教材が3教材(3/14 21.4%)、⑥逸話伝記関係教材が1教材(1/14 7.1%)、⑦戦争関係教材が1教材(1/14 7.1%)であった。その内の①の8教材の内訳をみると、家庭人、女性としての生き方関係3教材、親孝行関係2教材、儉約、学問、生死の関係が各1教材であった。このようにみえてくると、『元元堂女読本』の教材配列は、書簡文の内容及びその作者に関わる教材が前後に位置付いていることが特徴といえる。つまり、書簡文の内容に関わる配列となっており、書簡文は文範としての役割とともに、内容理解の教材としても重視されているということがいえる。書簡文が女性としての在り方や生き方を学ばせる女訓的な役割を有した教

材として位置付けられているのである。

下記に示す教材配列は、『吉田女読本』のもの、『元元堂女読本』との共通教材のものを抽出した。なお、関係7等は、『元元堂女読本』にある関係番号であり、関係7と関係6が番号順でないのは、『吉田女読本』の巻数の順番を中心に採録書簡文を並べたことによる。

- 関係7 2-23「田舎の祖母に」樋口夏子（書牘文）
2-24「右の返事従妹より」樋口夏子（書牘文）
 2-25「瓜生岩女」金子元臣（口語文）
- 関係6 6-5「日光便」徳富蘆花（書牘文）
 6-6「海軍戦死者ヲ祭ル」東郷平八郎
- 関係11 7-23「留守宅に」細井平洲（書牘文）
7-24「婦行」（漢文対照）
- 関係12 8-17「息女に教訓す」烏丸光廣（書牘文）
 8-18「舅姑」（原漢文）
- 関係13 9-5「妹にさとす」吉田松陰（書牘文）
 9-6「羽衣」

下線部は、『元元堂女読本』に採録されている書簡文教材で、波線は、『元元堂女読本』と類似の配列がなされている課である。

7-23「留守宅に」は、「おさめどのへ」と、8-17「息女に教訓す」は、「息女に教訓せし文」と同一教材である。同一教材でみると、関係11（波線部分）が課の順番は逆であるが、同様の教材配列がなされている。共通教材ではないが、『吉田女読本』には、女性の生き方や有様による教材配列では前述の7-23と7-24の他に、7-7「母の教訓」と7-8「齊家の道」がある。『吉田女読本』と比べ、『元元堂女読本』の教材配列は、より女性の生き方や有様といった内容面を生かした書簡文の位置付けがなされていることが看取できる。しかし、『吉田女読本』では、次の巻5のような教材配列がみられる

- 5-11 人なき跡を（書牘文、樋口夏子）
 5-12 文かく心得（樋口夏子）
 5-13 手かくこと（本居宣長）

5-11に実際の書簡文1通の文例が提示され、5-12で時と場合そして、受け取った者の思いを考えて書くことを具体的に説明し、5-13では書く内容と文字との関係からその態度を説くという配列になっている。この配列は芳賀矢一編『新定女子読本全8巻』（1912年 訂正再版）の巻6にもみられる。

- 6-18 交際は小出しにすべし（福沢諭吉）
 6-21 手紙の書き方（幸田露伴）
 6-22 手紙二章
 一 女中の周旋

二 娘より母の病氣看護の為帰宅せる女中に

6-18で書簡文を書く意味を説き、6-21で書簡文の書き方を具体的に提示し、6-22で実際に書いてみるための文範が採録されている（中嶋,2018b）。しかし、『元元堂女読本』には、これらの配列はみられない。

『元元堂女読本』は、書簡文は書簡文としての文範的な役割や文学的な役割で位置付け、その内容を捉え、より女性としての生き方や在り方を固めている、女訓的な傾向が強く打ち出されているといえる。つまり、書簡文採録においては女性の在り方を中心とした題材が多く採られていることが看取できるのである。それに対して、『吉田女読本』は、多様な観点からの採録がなされているといえる。付記するが、『明治女読本』の書簡文教材は、『元元堂女読本』及び『吉田女読本』との同一書簡文教材が1通もない。また、教材配列の観点でみると、多くの書簡文が地理的内容での教材と結び付いている傾向がみられる。例えば、3-4「上野公園の四季」と3-5「博物館見物に誘ふ文」、6-24「シカゴだより」と6-25「ナイヤガラ瀑布」のような関係である。これは『吉田女読本』にもみられ、例えば1-30「世界の事物は共通なり」志賀重昂、1-31「米国通信」岡田みつ（書牘文）、1-32「大海原」坪内雄蔵（韻文）である。

『元元堂女読本』の書簡文が、①文範、②内容理解、③女訓の精神の表出といったより精神面を重視した教材配列といえる。

3. 考察

本稿では、『元元堂女読本』に採録された書簡文教材に着目し、読本における書簡文教材の特徴および役割について議論した。その結果、以下の2点が明らかになった。

1. 文範としての書簡文と読むための書簡文とが採録され、読むための書簡文においては、前後の教材と相まって女性あるいは家庭人としてのあるべき姿を具体的に捉えることができるような教材配列がなされ、女性としての有様を内面的にも学ばせる役割を担っている。
2. 頭語、結語では社会の状況に応じた採録がなされているといえるが、口語文体が1通であることや行書での書簡文提示の割合が高いことから、書簡文を候文を読むことで学ばせ、行書で書くという規範のもとで、参考書的な役割を担っている。

本稿では、元元堂編の高等女学校読本を中心に検討したが、同時代に発行された他の読本との比較を通して、当時求められた書簡文の役割を捉える必要があると考えている。また、実科高等女学校との比較の中で、書簡文の位置付けがどのようなものであるかについても検討したいと考えている。

注

- 1 眞有澄香 (2005) の年譜には、T9.2.24 修正 9 版、T13.2.7 訂正、T14.2.2 訂正 12 版まで発行されていることが記されているが、稿者は現段階では前述の 3 読本については確認できていない。
- 2 眞有澄香 (2005) には、「大正一四年まで、実には一九版の六訂まで版を重ね」(p.48) とある。なお、稿者は現段階で 19 版六訂については確認できていない。

引用・参考文献

- 天野晴子 (1998) 『女子消息型往来に関する研究—江戸時代における女子教育史の一環として—』 風間書房
- 井上敏夫 (1981) 『国語教育史資料第二巻教科書史』 東京法令出版
- 小椋秀樹 (1997) 「明治期の女子書簡文における『参らせ候』の衰退：明治期女子用往来物を資料として」『語文』67 集,33-42.
- 小椋秀樹 (1998) 「書簡文研究資料としての明治期往来物」『論究日本文学』69,38-55.
- 小椋秀樹 (2001) 「書簡文研究資料としての『女子書翰文』」前田富祺先生退官記念論集刊行会『前田富祺先生退官記念論集日本語日本文学の研究』,123-130.
- 北澤尚 (1999) 「明治時代の女学生の書簡の文体」東京学芸大学紀要出版委員会『東京学芸大学紀要第 2 部人文科学』50,269-281.
- 元元堂書房編輯所 (1909) 『再訂高等女学校用国語読本参考書巻六』元元堂書房,27.
- 高山実佐 (2016) 「明治後期高等女学校講読用教科書における言語教材」国学院大学『国学院大学教育研究室紀要』第 50 号,51-63.
- 高山実佐 (2017) 「高等女学校講読教科書における言語教材—『女子国語読本』(吉田彌平ら編) 初版～六訂版の検討—」国語教育史学会田近洵一『国語教育史研究』第 17 号,39-47.
- 田坂文穂 (1964) 『近代教科変遷史国語科篇』東洋館
- 中嶋真弓 (2018a) 「『口語体書簡文に関する調査報告』にみる書簡文指導の在り方」愛知淑徳大学論集編集委員会『愛知淑徳大学論集 - 教育学研究科篇』第 8 号,29-41.
- 中嶋真弓 (2018b) 「芳賀矢一編『新定女子読本』にみられる書牘文の考察」愛知淑徳大学教育学会『学び舎』第 13 号,52-61.
- 中嶋真弓 (2019) 「吉田彌平読本にみられる書簡文教材の一考察 —芳賀矢一読本との比較を通して—」全国大学国語教育学会『国語科教育』第 85 号,32-40.
- 滑川道夫 (1977) 『日本作文綴方教育史 1 明治編』国土社
- 眞有澄香 (2005) 『「読本」の研究 近代日本の女子教育』おうふう
- 茗荷円 (2017) 『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう
- 文部省 (1910) 『明治四十三年度現在師範学校 中学校 高等女学校使用教科図書表』